令和6年度

児安小学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

PBS を活用した授業の実践

〇児童の実態に応じたカリキュラムマネジメント
〇「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
〇できるようになったことの自覚・共有につながる評価の工夫

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員 株田 沙耶香	委員 校長	南郷 孝嘉
	教頭	田邊 幸代
	教務主任	前田 加奈
	研修主任	佐藤 淑恵
	下学年推進委員	坂口 友啓
	上学年推進委員	上原 孝太

校長

南郷 孝嘉

【各校の取組状況の把握について】

◎次の（１）～（３）をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

（１）知識・技能の習得

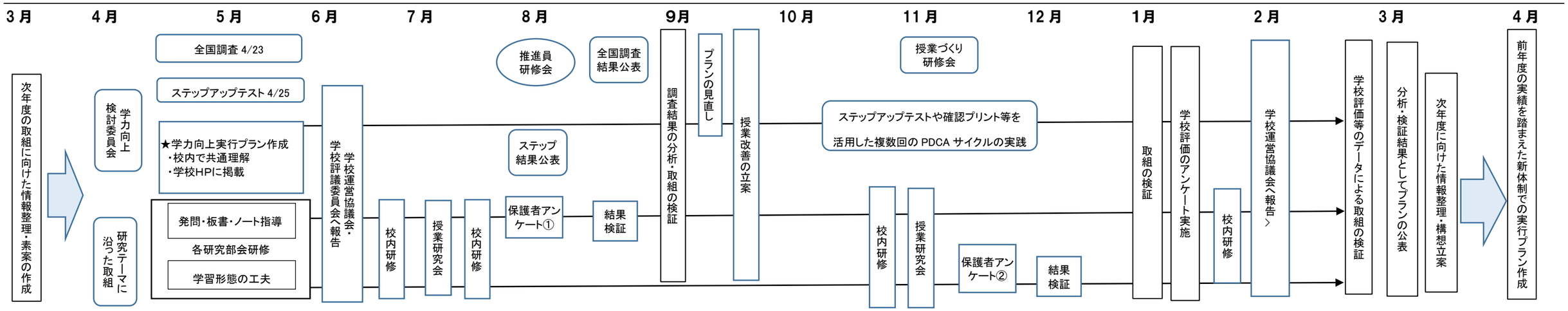
児童生徒の状況（〇よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
〇粘り強く最後まで課題をやり遂げることができる。 〇新しい技能や学習の習得に積極的に取り組むことができる。 〇課題に真面目に取り組むことができる。 〇各学年で発達段階に応じた授業規範ができている。 ●語彙が豊かであるとは言えない。 ●学力の基礎（姿勢の保持、声の大きさ、作業のスピード等）が定着していない。 ●個人、学年による学力差が見られる。	・学習の基礎の定着を図る。 ・基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、それを様々な学習場面で活用することができる。 ・辞典や資料、ICT 機器等から適切な情報を収集し、語彙数を増やすことができる。 ・友達の意見を聞き、自分の考えを深めたり修正したりする力を身に付ける。 ・読書活動の推進を図る。	・授業の中で、自力解決の時間を十分に確保し、個別指導を徹底する。 ・身に付けさせたい知識・技能を明確にするとともに、学習規律や学習方法を発達段階に応じて計画的に指導する。 ・単元の中で、身に付けた知識・技能を活用する場面を設定する。 ・児童一人一人のつまずきを捉え、学習状況の改善を図る。 ・ICT 機器を効果的に活用し、児童の個別最適な学びにつなげる。 ・月末に「チャレンジテスト」を行い、学力の定着を図る。	・ステップアップテストの結果から、文章の内容を読み取る力に課題があることがわかった。長文に慣れるために新聞や小説等を読む活動を取り入れ、感想や読み取り問題に取り組む時間を確保する。	・教科・単元によって、個別指導ができた時とできなかった時があった。 ・それぞれの発達段階に応じた指導の工夫ができた。（しかし、学年によっては、学力差が大きく実施できなかった学年もあった。） ・単元の中で活用する場面を設定することができなかった。教科横断的にはできた。 ・発達段階に合わせたICTの活用ができた。 ・スキル体系表があることで、情報スキルのゴールを明確にして学習を進めることができた。 ・毎月の「チャレンジテスト」を全学年実施できた。	・学習規律等の方向性を教員間で見極めて、提示し活用していく。（カリキュラムマネジメント） ・教師がしっかりめあてをもって授業を組み立てていく。 ・デジタルとアナログの使い分けをしていく。 ・「チャレンジテスト」の実施はできたが、活用に至らない。有効的に活用する方法を考える。 ・児童同士で教え合う活動を取り入れていく。

（２）思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況（〇よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
〇自分の考えを進んで手を挙げて発言できる児童が多い。 〇話し合い活動に積極的に参加し、自分たちで意見を出し合い交流することができる。 ●友達の意見を否定することはないが、全てをよいと認めてしまう傾向がある。 ●大切なことや話の要点を理解する力が不十分である。 ●課題についてじっくり考えたり思考を豊かに表現したりする力が不十分である。	・多面的な見方や考え方ができ、自分の考えを一人ひとりがもち、それを伝えたり、友達の意見を認めたりすることができる。 ・表現するために必要な基本的な語彙を習得したり、表現の仕方を深めたりすることができる。 ・学習活動に積極的に取り組み、自分の意見や考えに自信をもって発表することができる。	・学習課題を明確にし、問題解決に向かって個別に学ぶ場面と協働的に学ぶ場面を授業にしっかり位置づける。（カリキュラムマネジメント） ・自分の考えや立場を筋道を立てて話したり書いたりすることができるよう、発達段階に応じた指導計画を立てる。 （話し合い活動の時間の確保）	・知識・技能を普段の生活でうまく活動できていないことが課題として浮かび上がった。算数的活動を行う際、日常生活の場面に即して理解を深める場面を授業の中に設定するようにする。	・「何を達成できればいいのか」については意識して取り組むことができていた。 ・話し合いをする場面での自分の意見を自分なりの言葉でまとめることはできるが、うまく表現できない学年もある。 ・授業のなかで、個別→ペア→グループ→個別の流れが定着し、児童も自ら動くことができるようになった。 ・国語のデジタルコンテンツを活用して、話し合いの仕方等が動画でよく	・正しい言葉遣いで、言語環境の整備をする。正しい話し合いの仕方の話型等も発達段階に応じて提示する。 ・デジタルコンテンツ等を効果的に活用していく。 ・表現することが苦手な児童には、ICTの活用が効果的であるため、いろいろな表現方法の選択肢を設けるようにする。 ・ペアやグループで伝え合う場面の設定を意図的に増やす。

				わかり、話し合いやスピーチ等が上達した。（見本を示すことも行った。）	

（３）主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況（〇よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
〇読書活動の充実を図っており、読書が好きな児童が多い。 〇できるようになったことを続ける力がある。 〇課題解決に向けて、主体的に取り組もうとする児童が多い。 ●基本的な生活習慣が不十分な児童がいる。（早寝やメディア時間、朝ご飯等） ●主体的に取り組む場面での二極化（積極的と消極的）が進み、固定化されてしまっている。 ●家庭と連携した「おうち読書」の定着が課題である。 ●宿題の提出率は高いが、自主学習の時間は、個人差が大きい。	・目標をもって読書や学習に向かい、疑問点や興味関心のある事柄を進んで調べたり学習を深めたりできる。 ・学習過程において、学びを振り返り、学習の達成度や自分のよさ、今後の課題等を自覚することができる。 ・自分の「できる」「できた」を増やし、達成感を味わい、進んで学習に取り組むことができる。	・調べ学習や豊かな読書を推進するために、ICT機器や図書等、言語環境や学習環境を整備する。 ・ポジティブな行動支援を年間を通して計画的に取り組む。 ・児童のできたことを可視化して称賛する。 ・「児安ブックリスト」「おうち読書」「スマイル読書」」等を活用し、読書をする時間を意図的に設け、読書推進活動を実施する。		・「スマイル読書」を実施することで、どんな本を選ぶべきなのか、どのように読んだら伝わるのかを考えるようになった。 ・推進月間等は、児童全員がポジティブに行動することができた。 ・おしえてねカード（SWPBS）で毎月の自分を振り返る機会がもててよかった。 ・児童主体で活動させながら、できていることを教師が称賛することで、自分で考えて行動することが増えた。 ・おうち読書の定着が難しかった。読んだが感想を書けていない場合もあった。（高学年） ・とても効果的で、読書に親しむ児童が増えた。（低学年）	・関連図書の用意。（学習したことを豊かな読書活動へと発展させる。） ・年度の始めに、児童あいさつプロジェクト等、意識付けができる機会を増やしていく。（推進月間） ・「児安ブックリスト」「おうち読書」「スマイル読書」等を引き続き続けていきたい。 ・学校評価、おしえてねカード、週目標、いじめアンケート等、反省する回数が多かった。反省をするものを精選する必要がある。

令和6年度　学力向上ロードマップ